

2005年5月29日 聖霊降臨節第3主日礼拝

「神の恵みにゆだねられて」

(詩編8編4～5、使徒言行録14章21～28)

パウロたちは、アンティオキアの教会から遣われて、最初の伝道旅行に旅立ちました。その旅も、まもなく終わりに近づきました。パウロとバルナバは、自分たちを送り出してくれたアンティオキアの教会目指して、帰りの道につきました。道すがら、かつて二人が福音を告げ知らせた町々を訪ねては、迫害の中にいる弟子たちに、「信仰に踏みとどまるように」と励まして歩きました。また、各教会に長老たちを任命して、弟子たちを主の御手にゆだねました。この二つのこと、これこそが、聖霊のお導きによって歩んでいたことの証しです。ペンテコステの日に聖霊を受けて以来、教会は、いつも励ましに満ちています。単に、人が人を励ます、というわけではありません。イエス・キリストの名によって、信じる者たちは神に励まされ、立ち上がらせていただいたのです。どれほど人に励まされても、力のでないときがあります。また、あまりにひどい苦しみにあっている人を前にして、励ます言葉すら見当たらないときがあります。人の力には限りがあるのです。しかし、主イエス・キリストによる慰めは、どんな人をも立ち上がらせてくださいます。どれほど絶望的な状況におかれようとも、苦難は忍耐を生み、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ、わたしたちは知っています。「イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ」ているからです。今やわたしたちは、神の栄光にあずかる希望を誇りとさえしています。この「希望はわたしたちを欺くことはありません」(ローマ5章1～5参照)。

パウロは、ローマの手紙5章で、イエス・キリストこそ、わたしたちのすべて、慰め、励ましのすべてであると述べています。「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められたときに、不信心な者のために死んでくださった。・・・わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ローマ5章8)。キリストを通して示された神の愛、これこそが、唯一の慰めであり、わたしたちのよりどころです。この神の愛に触れて、わたしたちは、とこしえに励ましを受け、信仰の道を歩み続けることができます。それがどれほど困難であろうとも、この道を歩み続けることができるのです。教会にははじめから、このような励まし、聖霊による慰めが、充ち満ちていました。

この慰めの中で、使徒たちが取った次の行動が、長老たちを各教会に立てることでした。使徒言行録には、1章に12使徒を立てる話がでています。ユダの裏切りによって、欠けてしまった12人目を、神により選んでいただきました。この使徒たちをいしづえとして、さらに使徒7章では、7人の執事たちを、教会は選び出しています。そして使徒13章では、アンティオキアの教会が、福音伝道者としてパウロとバルナバの二人を選び出しました。教会は、二人の上に手を置いて、祈って彼らを伝道旅行に送り出しています。このよ

うに、聖霊に導かれた教会は、目に見える姿形を取ってきました。教会の制度の芽生えを、ここにみることができます。制度といいますと、形式ばかり重んじるても、心がなければ意味がないとか。見せかけだけになりはしないかと、心配する人々もいます。教会で制度という、信仰の墮落が始まったと拒絶反応を示す人すらいます。けれども聖書には、教会が古くから、形式と制度を非常に重んじていたことが、はっきりと書かれています。

そもそも聖書が、「教会はキリストの体である」といっているのが、その証拠です。「教会はキリストの体です」というとき、「からだ」とは、目に見える姿、形のことだからです。信仰において、教会の形や制度がとても大切にされていることがわかります。たしかに信仰は目に見えないものです。しかし目に見えないものは、必ず形になってあらわれます。心で思ったことは、顔の表情や立ち居振る舞いに表れます。いらいらやとげとげしい感情に支配されれば、言葉や振る舞いもぎすぎすしてきます。反対に、心に感謝と喜びが満ちていれば、表情は明るく朗らかに、まわりの人びとも平安をもたらします。もっとも、心が荒れていても、上手にそれを隠すこともできます。心には憎しみがあふれているのに、親切そうな言葉や顔で、人を欺くことも人間にはできます。大切なのは、ただ形をきれいに整えることではありません。わたしたちが心からキリストを信頼し、心から神に感謝していることが大切なのです。そして、そのような気持ちが宿っているなら、その気持ちを偽りなく、形に表すことが大切です。神に感謝をささげ、人々にやさしく接することができます。教会がキリストの体と言われるのも、そのためです。体を健康に整えること自体が目的ではありません。いくら体が元気で、キリストの救い、神の愛がなければ、人生は空しいものです。大切なのは、わたしたちが、キリストのからだであること。キリストのものであることです。パウロたちは、教会が、目には見えない信仰だけでなく、その姿形までもが、キリストの似姿となるように。そう願って、そうなれると堅く信じていました。今はどれほど問題が山積みでも、問題に満ちたわたしたちを、キリストは「わたしのものだ」とおっしゃってくださる。そのために御子は、罪なき体を罪人たちの手にゆだね、十字架にかかられました。キリストが償いのいけにえとなってくださったお陰で、わたしたち信じる者はみな、心も体も、神のもの、キリストのものとして、買い戻されたのです。「あなたがたは、(キリストの血の)代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現わしなさい」(コリント一6章20)。キリストによって、罪から贖い出され、神のもとへ買い戻されたのがクリスチャンです。この恵みに信頼して、パウロたちは、教会を、信じる主に委ねました。なぜなら、パウロたち自身も、そのようにして、主に委ねられて出発したからです。

14章26節をみてください。二人は伝道旅行を終えて、船に乗り、アンティオキアに向けて出発しました。「そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である」(26節)。さきほども触れたように、使徒13章1~3で、パウロとバルナバは、教会から選び出されて、伝道の旅を始めました。今、その働きをしめくくるにあたって、聖書は、彼らがどうしてその働きを果すことができたのか、その理由を思い

起こさせます。パウロとバルナバが、伝道の務めを果たすことができたのは、この二人もまた、神の恵みにゆだねられていたからです。二人を送り出すにあたって、アンティオキアの教会の人たちは、二人のために心から祈りました。二人がいつどこにいても、主が二人と共におられるように。その務めを十分に果たせるように。さまざまな危険と誘惑から、二人を神様が守ってくださるように。教会の人々は、パウロとバルナバのために、祈ってくれました。パウロ自身も自分のために祈ったに違いありませんが、それだけでなく、パウロとバルナバには祈りの応援団がいた。それが彼らを送り出した教会であった。このことが、どれほど二人を励まし、慰めたかわかりません。

これこそが、教会。教会が、キリストの姿、形を取り始めていたことの証拠です。キリストは、祈りの人でした。しかも、ご自分のために祈るだけでなく、わたしたち罪人のために、いつも祈っておられました。ある時は、山に登って一人で祈り。またあるときは、弟子たちと共に祈り。ゲッセマネの園では、眠りに負けて祈ることすらできない弟子たちのために祈り。ついに十字架にあげられてからは、キリストを憎み殺そうとするわたしたちのために、執り成し祈ってくださいました。「神よ、彼らを赦してください。」主イエスのあの祈りこそ、わたしたち人類を、神様の恵みに委ねた祈りではなかったでしょうか！ イエスの教えを喜んで受けたわたしたち。主イエスの手からパンを分けていただいたわたしたち。喜んで主のまわりに集ったわたしたち。なのにいとも簡単に心を変えて、キリストをいたぶり、十字架につけてしまったわたしたち。このわたしたちを、赦してあげてくださいと、真剣に神様に祈ってくださいました。主自ら、わたしたちに代わって、わたしたちのために祈ってくださったのです。

主イエス・キリストに祈られたわたしたちは、幸いです。この方が受けた苦しみはわたしたちの罪のためであったことを、後から気づかされました。そして、御子の十字架の死を心から痛むようになり、キリストの存在に気づいて受け入れた者たちに、神の赦しは豊かに注がれました。神の恵みは、それほど大きく、慰めに満ちています。このことを主イエスは、最初から知っておられました。イエスは、最後まで、恵みの主にご自身をゆだね、同じ神の恵みに、わたしたちを委ねていかれたのです。わたしたちは、真に罪を赦し、罪から救うことのできるただ一人の神に、委ねられた存在なのです。

わたしたち教会も、主イエスがしてくださったありがたい恵みに、すべてをゆだねていきましょう。自分自身をまず、神の恵みに委ね、そして愛する人々や迫害する人々をも同じ恵みに委ねていく。そうするなら、人の知恵や経験では計り知れない祝福が、わたしたちを包むでしょう。聖書も、こう語っています。「神が自分たちと共にいて行なわれたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこと」(27節)。自分たちを主の恵みに委ねて送り出してくれた人々があり、主の恵みに支えられて、恵みの中を歩み続けたがゆえに、神はいついかなるときも、わたしたちと共にいて、わたしたちを通して、大いなる御業を行なってくださる。今までは神様から遠い、救われるのは難しいそうに思えた人々にも、救いの扉は必ず開かれます。主の恵みの大いなること、確かです。主の恵みにゆだ

ねられている確かさ。すべてを主にゆだねていくことの喜びと平安を、これからも味わって
いこうではありませんか。祈ります。 [説教者：堀地正弘牧師]